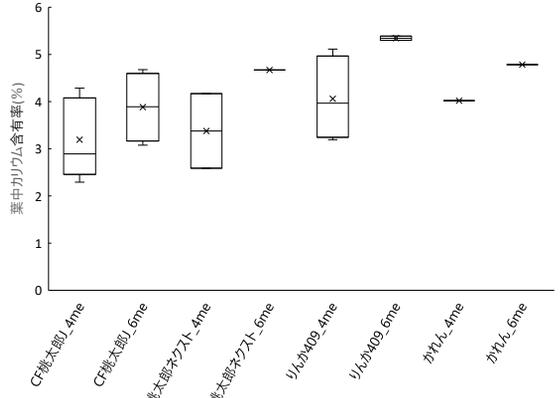
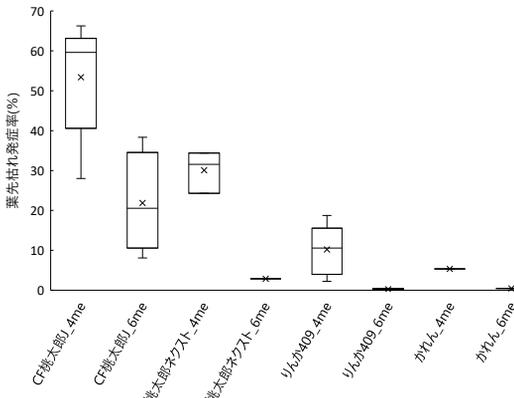


冬春トマトの葉先枯れ症対策に適した品種 および培養液管理を検討しました

トマト栽培における重要病害の一つである灰色かび病は、葉先枯れ部位からの感染率が最も高く、安定生産には葉先枯れを発症させないことが重要です。これまでに培養液処方のカリウム濃度を高めることで葉先枯れを軽減できることを明らかにしています。本研究では、県内で使用されている品種を中心に、複数品種で複数年(2016~2023年)における葉先枯れ発症率の違いおよびカリウム濃度を高めた培養液処方による培養液管理の実用性について検討しました。

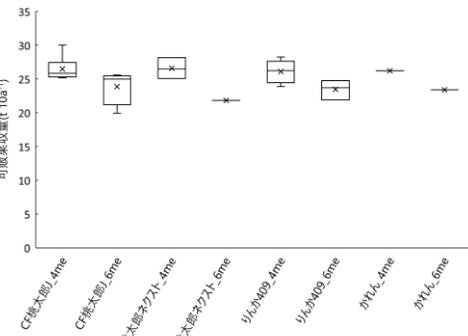


葉先枯れ部位から
灰色カビ病に感染

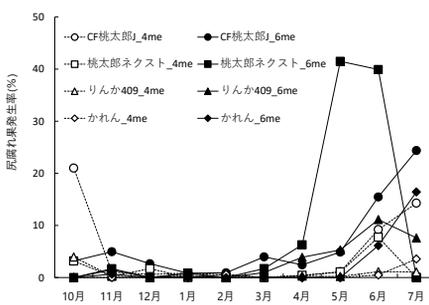


- ・葉先枯れ発症率の平均値は、CF桃太郎J>桃太郎ネクスト>りんか409>かれん
- ・りんか409およびかれんはCF桃太郎Jの1/5程度の発症
- ・カリウム濃度を6 meに高めた処方による培養液管理によって、葉先枯れ発症率が低下

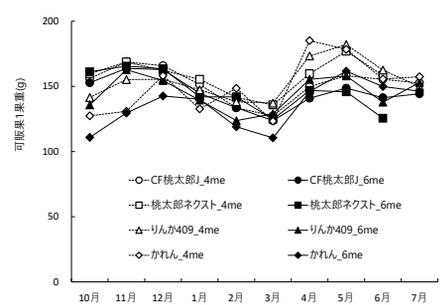
- ・葉先枯れ発症率が高いほど葉中のカリウム含有率は低い傾向
- ・カリウム濃度を6 meに高めた処方による培養液管理によって、葉中のカリウム含有率は1.2~1.4倍程度増加



- ・カリウム濃度を6 meに高めた処方による培養液管理によって、可販果収量は10~20%程度減少



高温期に腐腐れ果が増加



高温期に1果重が減少

(研究成果)

- ・品種「りんか409」および「かれん」は葉先枯れが生じにくく、葉先枯れ対策として有望と考えられました。
- ・葉先枯れ対策として培養液処方のカリウム濃度を高める方法は有効ですが、腐腐れ果の増加や1果重の減少により可販果収量が減ることがあるため、高温期を避け低温期に行うことが望ましいと考えられました。

(本研究は、(独)環境再生保全機構の環境研究総合推進費S-18により実施しました)